2018年度第1回安藤科研打ち合わせ 180723＠東南亭

参加者：安藤、内田、林、矢嶋、竹田、市川、大西、南出、浅田、赤松

・本年度の研究計画
交付申請書に記入済み。
バングラ、アッサム、ブータンの、世帯調査の検討会。
メンバー内で、調査村の結果を比較する機会をつくるのは？

アクションリサーチのプランを考える。
各地域の課題に対して、住民からアイディアを募る。
ミャンマーで昨年、大西さんが実施した。報告会の域を出ていない。
NGOと協力しないと実行できない。

調査村でワークショップ。
成果の還元。村人たちと結果についてディスカッションする。
まずは状況把握。土地利用の変化の中で、問題と感じていること。
村人自身も問題として意識していない。人口流出について。
研究者の意識に現場がついていっていない。
そもそも海外で過疎が問題化しているのか。
日本の中でも国外の動向に関心が高まっている。
SDGsのブームの一環で研究が始まっている。

ブータンではニュースでも頻繁に取り上げられる。
大学研究者も議論している。
東ブータンは、日本以上に村に子供がいない。
バングラは問題になっていない。
出稼ぎに行っても一時的。稼いだお金で村の土地を買う。
今の世代は停年を迎えると村に帰る。都市での生活は保障されていない。
次の世代は村の経験がないので帰らない。
若い世代と議論することは可能。
就職先としてのNGOワーカーは下火。国際機関の調査員の募集も減っている。
ハティヤでは世帯調査はしていない。屋敷地調査はしている。
ロータスに調査してもらうことは可能。
ドッキンチャムリアは全世帯の調査データある。
マレーシアでは人口流出で消失の危機に瀕している村もある。
農村と都市の二項対立は日本よりは弱い。
昔から移住がさかん。
経済レベル、教育レベルの向上で、民族間のバリアーは少なくなっている？
都会に出ても村に空き家を残す。開発の際に権利を主張できるため。

タイは道路インフラが整備される。多民族なので都市になじめない集団もいる。
北タイでも帰還者が奥地で新しい作物をつくっている。
タイ人系の村で廃村になっているところがある。
低地の村でカイガラムシ作りをやめた。年寄りばかり。木登りできる若者がいない。
地域全体が産地だったが、スポット的にしか残っていない。
もともと農業の副業で森から取ってきた。農業が衰退すると、カイガラムシ業も縮小。
日本は村から都市へと単一に進んでしまう。
高知の怒田集落は大学卒業生が 4 名入っている。
数名のレベルで村は人が増えている。
ミャンマーは、すべての人が目指すような一極化が起こらない。言葉・民族がちがう。
カチンの村でも、ヤンゴンではなくアメリカに行っている人もいる。
僻地では作物をつくっても流通経路がない。人が動いていく。
マウビンは変わっていない。ヤンゴンに季節労働に行く。
大西さんが行くヤンゴンから 1 時間の村。田んぼを潰してレンガ工場をつくる。
ボーガレ（イラワジデルタの先端）は村人が半減した。耕作面積も塩害で減少。
アッサムも村に残る人が多い。空き家は少ない。
グワハティの一極集中。コルカタやデリーには出て行かない。

ワークショップを開催して、以上のような地域差が比較できればよい。
各地域の特色をデータとともにまとめたい。
都市近郊の村と僻地の村でも条件は違う。

東南アジア全体を俯瞰できるデータはないのか。地図化できるようなデータはないか。
人口移動データでは、村に住所を置いたまま外に出る人は表れない。
世界銀行が公表している農村人口データ。マクロレベルではある。
データ上は各国の動向が同じでも、その背景要因は地域によって異なる。
村に戻るチャンスも潜んでいるのでは。
日本の場合は、もう村には戻れない。
トヨタ財団の申請で、日本、ブータン、ミャンマーを取り上げた。
ミャンマーの人に過疎の問題を説くには、ブータンの状況が分かりやすい。

地域比較が可能な、統計データはあるか？
バングラでは、rural/urban の人口がセンサス毎に発表される。District レベルまである。
アジア開発銀行、FAO あたりから、過疎レポートが出ているのでは？
MDGs の期間に、農村の貧困は問題になった。人口のことは注目されなかったのか？
過疎問題を測るには、人口減少率が用いられる。時間の概念が入っている。
1966 年の経済審議会の地域部会で登場。Wikipedia より。
地域の基礎的条件の維持が困難になること。
過疎になる指標（閾値）を検討するだけでそれなりの研究になる。

異なる国の過疎問題を比較する意味はどこにあるか？
日本の限界集落とタイの限界集落は同じか？
現象は同じでも各国の事情が異なる。

秋（11/25 or 12/2）に各国比較のワークショップを内輪で行う予定。
各自の実感を文章化する。グループミーティングなど実施して村人の感覚も調査する。
ブータンでは農業を志向する。
成果で冊子を作成する。

今夏の予定：

竹田　ミャンマー。半島部、シャン、もう 1 箇所。
タイはカセサート大学が学生実習として調査している。

大西　8-9 月にミャンマー。12 月か 3 月にも行く。
Paddy fish in Myanmar の冊子を 500 部印刷。ヤンゴンで 1 万 5 千円程度。

赤松　12 月、3 月。

矢嶋　乾季に 1 度。ラオスの過疎問題をまとめる。

浅田　8 月。2 月。12 月末？頻繁にインドに行き過ぎないように。
年 2 回は、ビジネスの e-visa がとれる。自分の名刺コピーがかかる。

林グループ
山根さんが 9/8 頃から 1 週間ほどバングラ。教育問題。
シレット以外の雨量計観測の縮小。
林は農学関係で南インド・バンガロール。
寺尾・福島さんはアッサムの茶園。

内田　各国のデータを集めて分析。URL の情報を伝える。
人口構成、農村都市移動者、転入転出、職業構成、教育レベル。

安藤　8-9 月にミャンマー、バングラ。
9 月にアメリカ 2 週間。コーネル大学、ミシガン大学。大学と地域との関わり。
トヨタ財団が採択されれば、ブータンとミャンマー。村人の交流。
1-3 月に PLA をする。ミャンマー・マウビン。
ブータンから 2 名を呼ぶ予定。

市川　9 月にマレーシア。

南出　8 月～3 月までバングラデシュ。11 月最終週は帰国している。

今年度は、国際ワークショップは開催予定なし。
国内で開催する南アジア集会は、気象グループで小規模の予算が使える。
気象グループから担当者を出す。

次回の研究会は 10 月。各自の調査報告を行う予定。

（メモ：浅田）